

第 I 部

日本の英文学研究界

第1章：日本の英文学研究と戦争

1. はじめに

第二次世界大戦中、日本の英文学者の中には、己の専門領域を当時の日本の国家のために積極的に活かすべく、真正面から現実社会と向き合い、実社会との深い関わりを求めた者もいた。こうした思いを強く抱いた英文学者は実際のところ、己の学問研究を、己の専門を、己の持てる力を、そして己の最大の武器とも言える英米事情に関する歴大な博学多識を、時の日本社会に対して役立たせようと努めた。その際、彼ら英語英米文学研究者は、非常に人間的な面をあらわにし、エモーショナルな面を前面に堂々と押し出した。敵国であるイギリスやアメリカの文学や文化を専門にしてきた彼らにしてみれば、己が持てる力を国家のために存分に発揮する時機が到来した、と大いに興奮し、奮起したであろうことは想像するに難くない。実社会と直結した、まさに生きた英米文学研究の存在意義をしんから自覚し、これこそが実践知性の最たるものと認識したにちがいない。

敵国の情報がのどから手が出るほど欲しい当時の大日本帝国首脳部から切実に支援を求められた場合もあったであろうし、あるいは逆に、研究者自らが自発的に、己の専門を活かした提言や情報提供を当時の社会に向かっておこなったこともありうるだろう。英文学者のこのような具体的な個々の事例については、宮崎芳三による『太平洋戦争と英文学者』（研究社、1999年）に詳しく記されているが、これを参考にしつつ本章において、山本忠雄、中野好夫、そして伊藤整の三人の英文学者の言説に焦点を当てて考察してみたいと思う。

己が持てる力を十二分に実社会に役立てようという堅固な志をもって戦時中、果敢に執筆活動に勤しんだ英文学者にとって、敗戦は実に不幸なことであった。なぜなら、戦後思想がこれまでとはすっかり変わってしまったからである。戦後は、「戦争は悪である」という思想一色に染まってしまった。第二次世界大戦中は国家の意思に積極的に賛意を表明し、実社会とのコミットメントを強く希求した英文学者にとって、戦後のこうした時代風潮は、非常に居心地が悪かったであろうと推察される。戦後の時代を一体どういう態度で生きてゆけばいいのかを、彼らは自問自答しないわけにはいかなかっただろう。

終戦後、「学問研究」という名の美辞麗句に守られ、学問研究は客観的・実証的態度に徹するべきで、個人の感情を出してはいけないのだという、まことしやかな教義を金科玉条とし、己の個人的感情等は封印し、日本国の実情からも目を逸らし、ただひたすらアカデミズムの世界にのみ閉じこもっていった英米文学研究者たちがいかに増大したことか（もちろん中には江藤淳や中野好夫のように、常に現実の社会との接点を視野に入れて仕事をした英文学者もいたが）。前述の『太平洋戦争と英文学者』において著者の宮崎芳三は、こうした英文学者の、ひとつ間違えば現実からの逃避になりかねない脆弱な研究姿勢に警鐘を鳴らしたと言えるだろう。いかなる学問分野にももちろん本質的に或る種の超現実的な、そして非実利的な側面が内包されているが、しかしそれが極端になった場合を宮崎芳三同様、筆者は憂えざるをえない。

閉塞感漂う非常に過酷なこの二十一世紀の時代状況にあって、今を生きる英語英米文学研究者は今後、いかなる仕事をなすべきかが真剣に問われることになるだろう。英語英米文学研究者が、自己の専門性に誇りを持ち、これを自信の源とし、より一層、現実の社会に向かって積極的に発言し、国際社会の真のオピニオンリーダーになるためにも、今一度、山本忠雄、中野好夫、

そして伊藤整という、戦後の日本を代表する偉大な三人の英文学者の行動軌跡を眺望してみるのも意義ある営為だと言えよう。

2. 英文学者の行動軌跡

英文学者・山本忠雄は、著書『英國國民と清教主義』（京極書店、1943年）の「序」において、「英國打倒の道を講じなければならない」と述べ、そのためには敵国・英国の弱点を見抜くべきだとし、そのひとつが英国の清教主義の理念だと説く。清教主義の世界発展が侵略的な相を帯びているが、その理念そのものが今では箍が弛んでいるゆえ、「本國及び各植民地は分散した政權と化し、東亞の侵略はおろか自立自衛すら困難となるであろう」（山本忠雄 178）、と断を下し、「英帝國衰亡史」の書ける日を期待する（山本忠雄 179）、と結ぶ。

この著書のなかで著者は、英文学研究の専門家としての立場からシェイクスピア、ミルトン、ワーズワス、そしてディケンズ等のイギリスの代表的作家の文学的資質にも言及しつつ、英国と英国国民の本質について読者に詳しくかつ鮮明に解きほぐす。イギリス作家たちに通底する強靱な英国的個性を充分認識した上で、著者は、「清教主義が妥協退化し、その海外に於ける尖兵が本國の國民道徳と矛盾を来す」（山本忠雄 179）と主張する。

英国研究のエキスペートである山本忠雄が己の信念に基づいて正直に真情を吐露する姿、また、これまでに蓄積した英米に関する知識を祖国日本のために役立たせたいという専門家としての切なる想いが読者の胸に切々と訴えてくる。今日の我々の目から見て、まさにこれこそが紛れもなく当時の実践知性としての英文学研究の一例と言えるだろう。ただ申すまでもなく、戦争責任という今日的観点に立てば、この種の研究態度に関しては自ずと評価が分かれるのは致し方ないだろう。

続いて中野好夫について言えば彼は、戦時中は上述の山本忠雄と同じよう

に己の持てる専門性を社会に還元すべく尽力したが、敗戦後はそれを深く反省し、戦後の民主主義の代表的な担い手として積極的に市民運動等に係わり、贖罪の態度を貫き通した。著書『酸っぱい葡萄』（みすず書房、1979年）の「いささか長すぎるまえがき」のなかで中野好夫は、「とりわけ敗戦直後、一、二年間のものを読んでくださる読者は、すぐとお気づきのはずと思うが、この時期のわたしは、はっきり天皇制支持（さすがに護持とは言っていないが）と書いている。嘘でない、その通りなのだ。いまでも憶えているが、敗戦時もっとも口惜しかったのは、戦争終結をわたしたち自身の手でついに達成しえなかったという痛恨事。言葉をかえていえば、当時聖断と呼ばれたきわめて奇妙な形によってしか実現できなかったという一事だった。また戦争協力ということからいっても、わたしは明らかに協力者の一人だった（少なくとも例の十二月八日以後は）。大学教師および文筆人として、いわゆる追放条件にこそ該当しなかったかもしれぬが、自身の反省としてはどう考えてみても協力者だった。反戦の実践など何一つやっていないのだ。ところが敗戦直後、もっとも不愉快だったのは、いっせいに国民相互による戦犯告発騒ぎが起ったことである。国民自身による相互告発も、一概に非とはいわぬ。だが、実際にそれらの急先鋒になったのは、なんとも滑稽きわまる猿の尻笑いだ。もっともひどいのは歴然たる転向者で、自身むしろわたしなど以上に協力者だったはずの連中が、にわかには矛を逆にして戦犯摘発にいきりたたったのである。現にある新聞などからは、戦犯指摘の葉書アンケートまできた。わたしは一言、中野好夫と答えておいた」と、戦時中の己の言動を偽らずに告白している。

実娘・中野利子著『父 中野好夫のこと』（岩波書店、1992年）を紐解けば以上のことは一目瞭然である。同著第3章「償いの人生」のなかで中野利子は、「父は疑いもなく、開戦を民族の理想の高揚として手放しで喜んでゐる。戦後になり、その当時の自分をふりかえって父は書く」（中野利子

71) と記し、中野好夫の著書から以下のような引用文を載せている。

……ぼくは実に複雑な矛盾を感じながらも、結局はけして日本の敗戦を祈ってはいなかったのである。……ぼくという人間の中に無意識的習性をなすまで叩きこまれていたものは、子供の頃からほとんど条件反射のように教え込まれていた、国家を離れて国民なしだの、個人の最高義務は国家の成員たることである、だのといった風の十九世紀的国家教育であった。太平洋戦争の十二月八日とともに、従来のぼくの懐疑的バランスを、とにかく戦争協力に決定せしめた自発的動機は、はっきりいうが、やはりそうした無意識的習性であったように思う。
(「自由主義者の哄笑」1951年12月)(中野利子 71-72)

「太平洋戦争下、一国民として時局に忠実であったというだけでなく、言論人として自分の書いた文字が人々に影響を与えたという点に、父の深刻な反省があったと思う」(中野利子 75) と語る著者は、「戦後の父の人生は、ある意味では贖罪の人生だったと断言してもいいと思うようになった」(中野利子 82) と述べ、父・中野好夫の戦後の一連の平和主義・戦争反対・反ファシズムの態度に理解を示している。

戦後を代表する知識人のひとり、加藤周一は、著書『言葉と戦車を見すえ一加藤周一が考えつづけてきたこと』(筑摩書房、2009年)において、英文学者・中野好夫が置かれた戦時中の複雑な彼の立場を、共感を覚えつつ以下のように記述している。

中野好夫(1903-85)は日本文学報国会に参加し、たとえば昭和十八年(1943年)二月、その外国文学部会のとるべき方向を論じている。そこで強調されているのは、明治以来の無批判な外国文学移植を再検

討すると共に、「この時局多難な時にあっても」外国文学の研究・移植の道を閉ざしたくない、ということである。中野がその報告のなかで直接いくさに触れていった言葉は、ただ「この時局多難なとき」の一句に尽きる。それはたとえば国文学部会についての久松潜一（1894-1976）の報告に、「皇国の大事」や「尽忠報国」や「国体の本義」というような言葉が連発されているのと、あきらかにいちじるしい対照をなしている。久松はどこまで本気だったのか。中野はむろん本気であった。本気で、今よんでもおかしくないことをいったのである。つまり文学報国会のなかで可能なかぎりの道理にかなったことをやろうというのが、中野の意図であったように思われる。（加藤周一 169-170）

加藤周一は、中野好夫の戦時中の「協力」の背景には中野の「社会的関心」の激しさがあり、その「社会的関心」の背景には「正義感」の強さがあったのだろうと推測し、これこそが戦後に発揮した中野の民主主義的諸活動の原動力であったと断ずる。「聖戦」ということばのばからしさにもかかわらず、あえて傍観をいさぎよしとしなかった中野の「社会的関心」の強さが戦後の彼の民主主義運動の原点だ、と加藤周一は言う。

次に、英文学者・翻訳家であると同時に小説家でもある伊藤整についてであるが、ドナルド・キーン著／角地幸男訳『日本人の戦争—作家の日記を読む』（文藝春秋、2009年）が詳説しているように、伊藤整は、己の日記にひたすら大和民族の勝利とファシズムの永続性を信じる文章を綴った。

……伊藤整（1905-1969）は、日記とエッセイの両方で開戦を喜び、予想されるアングロサクソンの壊滅に期待をかけている。しかし、真珠湾攻撃を知った時点での伊藤の反応は意外なほど冷静だった。伊藤

は日記の中で、街やバスの中で見かける誰一人として、戦争のことを話題にしているようには見えないと記している。通行人の顔は、誰もが「むっとして」いるように見えた。しかし伊藤自身は、真珠湾の奇襲でアメリカの戦艦が撃沈されたニュースに「日本のやり方日露戦と同様にてすばらしい」と快哉を叫んでいる。……伊藤は自分の高揚する気分を弁明する必要を認めなかったが、教師ならびに翻訳者として英語と身近な関係にあった人物が、幾分か躊躇を感じることはなかったのだろうか。(ドナルド・キーン 23-24)

実はドナルド・キーンは同書にて、英文学者・吉田健一さえもが昭和16年12月の日記に「興奮して居るのではなく、揺ぎのない感動がある儘に凡てが我々には新鮮に見えるのである。空襲も恐れるには当たらない。我々の思想の空からは英米が取り払はれたのである」(ドナルド・キーン 28)と記している事に驚き、「吉田のような英国文学者が、日本の空から外国の思想の重苦しい雲が払われたことを喜んだのは意外である」(ドナルド・キーン 29)、と心境を語る。

伊藤整に話を戻せば、ドナルド・キーンは、作家・平野啓一郎との対談「戦争と日本の作家」(『文学界』所収、文藝春秋、2009年9月号)において、イギリス文学の専門家であった伊藤整が第二次世界大戦勃発と同時に英米人に敵対心を抱き日本の戦争思想に染まっていったことに驚いた、と言う。そして伊藤整の人物像に関してドナルド・キーンは以下のように述べる。

伊藤整は、『ユリシーズ』の翻訳に参加したし、ジェイムズ・ジョイスを自分の師と言いましたけども、はたして英文学が好きだったかどうかわかりません。変な話ですけれども、私の知った日本人の英文学者で、ほんとに英文学を愛している人はそうたくさんいないです。

フランス文学、あるいはドイツ文学、ロシア文学の研究者にはそういう人はいるでしょう。多くは最後には日本文学のことを書きます。しかし、私の友人の篠田一士さんはたいへん素晴らしい英文学評論家ですが、彼は中国文学が最高だと言っていました。(ドナルド・キーン 192-193)

ドナルド・キーンは前述の著書『日本人の戦争—作家の日記を読む』（文藝春秋、2009年）の「序章」においても、「伊藤整の日記に、わたしはかなりのショックを受けた。特に戦争勃発直後の日記に出てくる人物は、わたし知っていた柔和でユーモアに富む親切な人物とは似ても似つかなかった。昭和十六年の戦争勃発は、たしかに数多くの平凡で好戦的でない日本人の中にも熱い愛国心を呼び起こした。しかしアングロサクソンの列強を破ることが、日本人が世界で最も素晴らしい人種であることを示す好機である、と伊藤のように戦争に狂喜した日本人はごくわずかしかない。……難解なジョイスを翻訳するという緊張の連続が、アングロサクソンに対する伊藤の憎しみを煽ったであろうことは容易に想像できる。そして伊藤は、自分たち日本人が英文学の中でも一番難解な作品を翻訳したにもかかわらず、アングロサクソンは現代日本の文学に何も関心を示さないという事実憤慨したかもしれない。しかし伊藤が日記の中で示した憎悪は、翻訳者として感じる欲求不満の域を超えている。その柔和な物腰にもかかわらず、伊藤の内にある激情的な何か日記に捌け口を見つけたのだった」（ドナルド・キーン 12）と、胸の内を語っている。伊藤整とは友人としての親しいつきあいがあっただけに、ドナルド・キーンの落胆ぶりは想像するに余りある。戦後の伊藤整は、深交のあったドナルド・キーンに対してさえ過去を語らなかったようである。

3. 実践知性としての英米文学研究

竹友藻風は自著『文學遍路』（梓書房、1933年）のなかの「日本人の立場より」と題するエッセイにおいて、「日本人の立場より英文學を理解することは不可能であらうか」（竹友藻風 3）と自問し、文学の場合、「窮極は一切文化の起源とも言ふべき一つの普遍的な世界を背景とすることになる」（竹友藻風 12）という点さえ押さえおけばそれは可能だと思う、と言う。英文学であれ日本文学であれ、その基底にある共通の普遍的真理に注視しつつ文学研究を進めていけばいい、と述べている。今から80年前の昭和8年の段階で、英文学者・竹友藻風が日本の英文学研究のありようについて模索している様子に、私たちは感慨を覚えずにはいられない。時代を超えて外国文学研究者の呻吟するさまが窺い知れる。

昭和14年（1939年）、英文学者・深瀬基寛は、著書『現代英文學の課題』（弘文堂書房、1939年）の最終章「英文學研究の一課題」で、日本の英文学界の現状と将来に関して私的な見解を開陳する。深瀬は、「生と學との遊離」（深瀬基寛 259）を問題にし、これによって「自分の立場との釣合が失はれる」（深瀬基寛 260）と指摘する。現に日本の英文学者は、ドイツ文学者やフランス文学者とは違って、日本の文壇とも接触がなく、一般知識階級から隔絶していると嘆き、結局のところ深瀬基寛は、これからの日本の英文学研究の目指すべき道のひとつとして「批評の研究」を挙げている。著者は実人生と学問研究の融合を、文芸批評という研究領域のなかに見出したにちがいない。

昭和15年（1940年）発行の荒川龍彦の筆になる『現代英國の文學思想』（理想社出版部、1940年）には、先述の書物の著者たちに見られた、一英文学徒としての懐疑や眩きは全く出てこない。著者はイギリス文学思想の核心に迫るべく、英国の伝統と文化、主知主義、ヒューマニズム等について博引旁証して健筆を揮う。時代状況をもちろん踏まえており、たとえば、英国

の現代作家たちは「現代の英國及び歐州諸國の政治、外交といふものに反旗を翻して、英國そのものの官僚的國是であるデモクラシイに對しては特に痛烈な非難を與へてゐる。そして勿論、外に對してはヒトラーのナチズム、全體主義にも反對する」(荒川龍彦 316)と、今日の私たちの眼から見ても沈着冷静な觀察をなしている。前述の昭和18年発行の山本忠雄の著書『英國國民と清教主義』(京極書店、1943年)とは趣きを異にしている。

ところで戦後、著名な英文学者として、また評論家としても活躍した江藤淳は、敗戦時、12歳の少年であった。昭和28年(1953年)慶応義塾大学文学部に入り、英文学を専攻する。一連の夏目漱石論でつとにその名を世に知られるようになったが、彼の『閉された言語空間—占領軍の検閲と戦後日本』(文藝春秋、1989年)という著作の存在を私たちは決して忘れてはいけないと思う。占領期間中のGHQによってアメリカに都合のいい歴史や文化に取って替えられた日本の今日の言語空間を江藤淳は「閉された」と呼び、その後々までの影響は侮りがたく、今なお日本人の思考にとって大きな足枷となっているのが問題だ、と説く。1933年(昭和8年)生まれで、明らかに戦後活躍した人ではあるが、第二次世界大戦後の日本国と日本人に鋭利な眼差しを常に向け続けた英文学者である。英文学研究を生きた実践知性として現実社会に還元した知の巨人と言えるだろう。彼の代表的著書『作家は行動する—文体について—』(講談社、1959年)の題名通り、江藤淳は、まさしく「行動する」作家であった。

これまでの日本の英文学研究界は、明治・大正・昭和を通じて人文学系の諸分野の牽引役を果たし、圧倒的な力と輝かしい実績を誇ってきた。言語学者・大津由紀雄は自著『危機に立つ日本の英語教育』(慶応義塾大学出版会、2009年)において、かつては英語学や英米文学を対象とした本流の英文科が今やコミュニケーションの隆盛によってすっかり衰退してしまい、日本の英文科で英文学を専攻する学生・院生の数は激減してしまった、と慨嘆する。

こうした状況下、日本の英文学研究界に命の水を注ぎ、その基盤を整備し、英文学専攻者の学術研究活動の活性化を目指すためにも本章は、温故知新の精神に則り、日本の代表的な、優れて知の人であった三人の英文学者（山本忠雄、中野好夫、伊藤整）が人間の極限状況ともいえる戦争との関わりにおいて見せた素顔を追った。学者として、また知識人としてまことに稀有な存在であった彼ら三人の英文学者たちの当時の生き方・考え方から私たちは、一体何を学ばよいか。これに関してはもちろん、人それぞれ思いが異なるであろうが、ただ言えることは、これを機に、日本の英文学研究が明治以来本質的に内包しているさまざまな問題点を私たちは別抉し、冷静に吟味・検証しなければならないということである。混迷の時代を生きる日本の英文学徒にとって、このような思索は必須である。もはやこれ以上の判断保留は許されず、私たちは厳しい現実を直視せねばならないだろう。

最高学府の知の体系と権威が危機に瀕した時代に学生であった筆者は、たまたまチャールズ・ディケンズ文学を専攻したがため、田辺昌美教授が学派を率いておられた関係で、当時学会は広島で頻繁に開かれた。学舎に残る原爆の爪痕と、その学び舎で精力的に英米文学研究に励む研究者たちの姿が、今なお筆者の脳裏に焼きついている。海外留学をしなかった筆者にとって、広島こそ英文学事始めの原風景である。広島学派の凄まじいまでの精力的な英文学研究態度に筆者は圧倒されたものである。今、かつてのまばゆいばかりの英文学研究界の復活を情動的に望むのは、決して懐古趣味からではなく、世界のさまざまな紛争解決のためにも、英語を駆使し英米事情に通暁した真の英米文学の専門家が求められていると、筆者は固く信じるからである。日英・日米外交の重要度は日増しに高まり、さらにまた、近隣諸国との関係も侮れない昨今、英米ならびに世界の事情に通じた英文学のプロフェッショナルの責務は大きい。

停滞気味の日本の英文学研究界において今、英米文学研究を生業とする者

は、大学の英文科や学会内部だけではなく、外の世界に向けて英米文学研究の価値や意義をこれまで以上に強く訴えかけていく必要があると思われる。英米文学研究によって産み出される実質的な社会的効果についてももっと強調してもいいのではないだろうか。

かつて日本の人文学的知性の育成に大いに貢献してきた日本の英米文学研究界の今後の一層の活性化を願い、さらに実践知性としての英米文学研究の構築を希求する立場から、学識と知性を持ち合わせた知の巨人の言説について考究しつつ、日本の英米文学研究界が包含する問題に些少なながらも肉迫したつもりである。

第2章：「日本の英文学研究」考

1. 日本の英文学研究界概説

日本の英文学研究は、明治・大正・昭和を通じて人文学系の諸領域の牽引役を果たし、圧倒的な力と輝かしい実績を誇ってきた。夏目漱石（1867－1916）や坪内逍遙（1859－1935）は、紛れもなくこの学問分野の先達・先覚者であり、開祖であった。彼らは日本の英文学研究史に燦然と輝く巨星である。

日本近代文学を代表する文豪・夏目漱石の文学的源流は、英文学研究である。漱石は、1888年（明治21年）9月、第一高等中学校本科第一部（文科）に進学し、英文学を専攻する。漱石、21歳の時である。1890年（明治23年）7月、第一高等中学校本科を卒業し、9月に帝国大学文科大学英文科に入学する。1893年（明治26年）7月、帝国大学を卒業し、大学院に進学。その後、愛媛県尋常中学校嘱託講師等を経て、1896年（明治29年）4月、第五高等学校英語講師（7月に教授）となる。1900年（明治33年）6月、文部省給費留学生として二年間の英国留学を命ぜられる。1903年（明治36年）1月、帰国し、3月に第五高等学校を辞職した後、4月に東京帝国大学文科大学講師となり、「英文学概説」等を講ずる。漱石は帝国大学で英文学を教えた最初の日本人である。1907年（明治40年）3月、東京帝国大学及び第一高等学校を辞職し、4月に朝日新聞社に入社して作家の道に専念する。

夏目漱石の英文学研究の裾野は広く、作家・作品論のみならず、西洋美術への思い入れにも尋常ならざるものがあつた。彼の英文学研究は、まさに文学、文化、美術の融合であり、21世紀現在の英文学研究と比べても全く遜

色のないものである。まさしく今日の日本の英文学研究の原点となっている。英文学者として文学の真髓を極めようとした漱石の、高邁な学問的精神に支えられた破邪顕正の気概と情熱は、今でも私たち英米文学研究者の心に漣を立たせる。

近代日本文学の先駆者である作家・坪内逍遙は、漱石同様、英文学者でもあり、特に、その半生をシェイクスピア全集40巻の翻訳に費やした功績は、日本の演劇芸術史上、特筆に値する。また逍遙は、日本の英文学界を先導した早稲田大学文学部の設立者でもあり、その行政手腕にも脱帽せざるをえない。逍遙の英文学研究手法も漱石のそれと同じく、今日の日本の英文学研究の原点である。

こうした知の巨人たちによって拓かれた日本の英文学研究は、明治・大正・昭和と、長きに亘って日本の人文学領域のフロントランナーとしてひたすら走り続けてきた。しかるに現在とは言えば、制度疲労により恐るべき危機に瀕していると言わざるをえない。日本の大学英文科で英文学を専攻する学生・院生の数は激減してしまったのだ。この現象は、英語を教える大学教員の専門にも如実に表れており、英米文学専攻を堂々と名乗る大学英語教員は数少なくなってしまった。今や英語を担当する大学教員の専攻は、英語教育実践学が主流となった。英語教育学が英文学を凌駕したのである。

日本英文学会会長・國重純二（当時）は、日本英文学会ニューズレター（No. 90, 2000年11月8日）において、「英文学会の活性化について」と題する文章を物し、「憂慮すべき事象」という表現を用いて、低迷気味の日本の英文学界の様相を憂え、活性化を唱えた。言語学者・大津由紀雄は、編著書『危機に立つ日本の英語教育』（2009）の中で、かつては英語学や英米文学を対象とした本流の英文科が今やコミュニケーションの隆盛によってすっかり衰退してしまった、と慨嘆する。批評家ジョージ・スタイナー（George Steiner）の *Language and Silence*（1967）に拠れば、英文学の本場イギリ

スにおいてさえ、英文科は停滞気味で、閉塞感が漂っているとのことである。これを打開し、活性化させるためには今やひたすら本を読むことが必須だ (A book must be an ice-axe to break the sea frozen inside us. George Steiner 90)、とジョージ・スタイナーは言う。

日本の英文学研究界は2013年現在、果たして國重純二の願い通りに、活性化されたであろうか。筆者は、むしろ事態は一層深刻になったのではないかと思料する。前述の如く、明治・大正・昭和を通じて日本の英文学研究界は人文学系の諸分野を牽引し、圧倒的な存在感を示してきた。ところが今はと言えば、前掲の天津由紀雄も述べているように、英文科という学科自体が変質しつつある。かつて英文科では主流であった英文講読という科目もめっきり減ってしまった。今は一部の大学を除いて、明治以来の英文科体質から脱皮し、英語実践運用能力を主眼とした英語教育実践学が主流となっている。

筆者は、かつてのまばゆいばかりの英文学研究界の復活を情動的に懐古趣味から望んでいるわけでは決してない。むしろ筆者自身、英文学専攻とはいえ、元々は教員養成系の英語科出身ということもあり、或る意味では醒めた眼で常に己の専門のありように呻吟しており、とりわけ若年層の就職状況が過酷なまでに厳しい日本の現実社会を直視した時、これまでの日本の英文学研究が衰退しても致し方ないものだと思っている。現代社会のニーズを侮ることはできないし、時代の趨勢には逆らえないからである。まずもって若者たちの就職確保が第一である。

現に今、日本の大学教育は総じて変革・変貌の時を迎えている。かつて右肩上がりの経済的成長を謳歌した日本企業には余裕があり、たとえ学生が大学で浮世離れした英文学を専攻しようが、企業はそんな学生をも黙って受け入れてくれ、採用後にその学生を一人前の社会人になるよう育ててくれた。ところが今や企業側にそんな余裕は無く、大学卒業生に即戦力を求めるようになった。これは厳然たる事実である。外国語科目関連で言えば、実践的言

語コミュニケーション力がこれまで以上にひたすら求められるようになった。教養などという無形のものではなく、実際に形にあらわれたものが要求されるようになったので、学生たちは、たとえば TOEFL や TOEIC という語学検定試験に向けて必死に奮闘せざるをえない。こうした状況下、かつての英米文学主流の英文科が姿を消していくのも仕方がないことかもしれない。

実際のところ、これまでの日本の大学英文科は、概して教養主義・主知主義に立脚するがあまり、基本となるはずの英語そのものの運用面での訓練を重視してこなかったことは否めない。夏目漱石がロンドン留学中の日記（1901年1月18日）に、「日本人の英語は大体において頗るまずし。調子がのらぬなり。変則流なり。折角の学問見識もこれがために減茶々々に見らるるなり。残念の事なり。字の下手なものが下品に見ゆるが如し」¹⁾と記しているが、これは、漱石以後今日に至るまで、教養主義を謳う日本の英文学界が長きに亘って形成してきた体質ではなかったであろうか。西洋からの文物移入とその紹介という啓蒙的役割に汲々とせざるをえなかった明治以降の日本にしてみれば、或る意味で致し方なかったかもしれない。「日本は三十年前に覚めたりという。しかれども半鐘の声で急に飛び起きたるなり。その覚めたるは本当の覚めたるにあらず。狼狽しつつあるなり。ただ西洋から吸収するに急にして消化するに暇なきなり。文学も政治も商業も皆然らん。日本は真に目が醒ねばだめだ」²⁾と漱石が日記（1901年3月16日）に記した通り、文明開化以後の西洋文明・文化の吸収・消化に時間を費やすはめになり、その一翼を日本の英文学界は担ってきたのである。だから、現在の英語教育学が主眼とする発音指導やスピーチクリニックなどの語学教育的側面に関わる余裕など日本の英文学界にはなかったであろうと思われる。そして今や社会的ニーズの高い語学教育的役割を英語教育学が果たすようになった。英文学は時代に取り残されたと言えよう。

しかし、本当に日本社会は若年層に、たとえば英語運用能力という即戦力

だけを求めているのだろうか。むしろ、即戦力もさることながら、同時に実社会は問題解決能力や創造力の鍛錬をも彼らに求めているのではないだろうか。諸学説を鵜呑みにせず、他者の意見に盲従せず、常に己の頭で思惟し、己の言葉で発信することができるという、そんなホリスティックな能力を若者は必要とされているのではないだろうか。世界のさまざまな紛争解決のためにも、たとえば英語が自在に駆使できると同時に、英米事情にも通暁した人材が広く求められているのではないだろうか。日英・日米外交の重要度は日増しに高まり、さらにまた、近隣諸国との関係も侮れない昨今、英米ならびに世界の事情に深く通じた人材を養成するには、今や忘れ去られた感のある英文学の果たす役割もまだ幾分残っているのではないかと筆者には思われてならない。

その際、停滞気味の日本の英文学研究界において自らの意思で英米文学研究を専攻する大学教師は、これまでのように大学の英文科や学会内部だけに閉じこもるのではなく、外の世界に向けて英米文学研究の価値や意義をこれまで以上に積極的に強く発信していく必要があると思われる。英米文学研究によって産み出される実質的な社会的効果についても、もっと声高に主張してもいいのではないだろうか。なぜなら、ロシア語会議通訳者ならびに作家として多方面で活躍した米原万里も説いているように、「文学こそがその民族の精神の軌跡、精神の歩みを記したもので、その精神のエキスである」³⁾からである。

かつて日本の人文学的知性の育成に大いに貢献してきた日本の英米文学研究界の今後の一層の活性化を願い、さらに実践知性としての英米文学研究の構築を希求するためには、学識と知性を有し、日本の英米文学研究界を常にリードしてきた過去の知の巨人の言説について考究し、そのことによって顕在化する日本の英米文学研究界が包含する本質的問題に肉迫することから始めなくてはならないだろう。その意味では宮崎芳三の仕事の持つ意義は大き

い。著書『太平洋戦争と英文学者』（1999）の中で宮崎芳三は、学問としての英文学研究の始祖・斎藤勇の仕事の中身を徹底的に吟味・検証した結果、日本の英文学研究は本来的に脆弱なものであり、そこに見られるのは「勤勉」だけで、自分自身を見失った国籍喪失の傾向が顕著だと裁断している。対象学問が本来的に有する脆弱さを感じてしまったとき、宮崎芳三ならずとも私たち日本の英文学徒は、茫然自失するの他はない。ただでさえ閉塞感漂う非常に過酷なこの二十一世紀の時代状況にあって、今を生きる英語英米文学研究者はこれから先、いかなる仕事をなすべきかが真剣に問われることになるだろう。英語英米文学研究者が、自己の専門性に誇りを持ち、これを自信の源とし、より一層、現実の社会に向かって積極的に発言し、国際社会の真のオピニオンリーダーになるためにも、温故知新の精神に則り、戦後の日本を代表する偉大な英文学者の行動軌跡を眺望して見るのも意義ある営為だと筆者は固く信じ、前章において主として山本忠雄、中野好夫、そして伊藤整という三人の英文学者の第二次世界大戦中の言説を注視し、つぶさに検証した⁴⁾。

こうした一連の検証作業を通じて、太平洋戦争中の日本の英文学者の中には、己の専門領域を当時の日本国家のために積極的に活かすべく、真正面から現実社会と向き合い、実社会との深い関わりを求めた者がいたことが判明した。実社会との直接の接触を希求した英文学者は、己の学問研究を、己の専門を、己の持てるすべての力を、そして己の最大の武器とも言える英米事情に関する歴大な博学多識を、時の日本社会に対して役立たせようと努めたのである。敵国となった英米の文学や文化を専門にしてきた彼ら英文学者にしてみれば、己が持てる力を国家のために存分に発揮する時機が到来した、と大いに興奮し、奮起したであろうことは想像するに難くない。現実社会と直結した、まさに生きた英語英米文学研究の存在意義をしんから自覚し、これこそが実践知性の最たるものだと彼らは認識したにちがいない。慶應義塾

大学名誉教授・白井厚が著書『大学における戦没者追悼を考える』（2012）の中で、「英語を勉強することによって、高いところに立って普通の人には見えないところが見えるようになる。敵国の文章をいち早く直接読むことができ、それだけ視野が広がる。敵の状況が分かって戦争に勝てる。だから英語学とは展望台の学問であり、戦争に役立つというふうに、論を展開します。そうすると、なんとなくそんな感じもして、英語を一生懸命に勉強できるようになります。海軍は英語を使っていましたしね⁵⁾と、述べている通りである。

本章では、既に検証済みの上記三名（山本忠雄・中野好夫・伊藤整）以外の、第二次世界大戦後の日本において英語英米文学、とりわけ英語学領域を主導した英語学者・梶井迪夫の戦中の仕事を先ず概観することによって、実践知性としての英文学研究のありようを改めて思念し、さらには、日本の英文学研究が孕む問題点と今後の展望にも思いを馳せたいと思う。

2. 英文学者の言説の検証

先行研究の一つとしては、ドイツ文学研究者・高田里恵子の『文学部をめぐる病い — 教養主義・ナチス・旧制高校』（2001）がある。高田里恵子の研究対象は日本におけるドイツ文学であるが、学問的手法に関しては筆者の場合と通じるものがある。著者・高田は「あとがき」で、本書は著書というよりもむしろ引用集と呼んだほうがよく、日本のドイツ文学研究者たちの言説を蘇らせて、コラージュし、それ自体に語らせた、と言う。実際、高田は博引傍証して自説の正当性を主張していく。ドイツ文学者・松本道介に拠れば、文芸評論家・齊藤美奈子は朝日新聞書評欄（2001年8月26日）で高田のこの本を絶賛したとのことだが、しかし松本道介は高田の仕事に対して批判的であることを、私たちは肝に銘じて忘れてはならない。松本は、「高田氏が史料に丹念にあたられる点には敬服するが、文学者であるなら、あるい

は歴史学者であっても、史料の文章の質といったものにも多少の吟味はおこなってしかるべきだと私は思う⁶⁾と、辛辣である。松本は、高田里恵子の史料の弁別力不足を嘆いたのである。筆者は、こうした事例に鑑みて、松本の言う「文章の質」に留意しつつ、榊井迪夫の第二次世界大戦中の言説を眺めてみる。

広島高等師範学校助教授であった榊井迪夫は、第二次世界大戦真っ只中の1943年（昭和18年）、『アメリカ文化の特性』という書物を著わした。「序」で著者・榊井迪夫は、「アメリカは敵國である。英國も屠らなければならぬ敵國であるのだ」と言う。何を意図して著者がこの本を上梓したかが、この一節を見ただけでも一目瞭然となろう。さらに著者は、著書出版の意図を次のように明示する。

アメリカに就いての知識は昨今續々と出版せられる書物から集積することができる。之は十年前を思つて見て、喜ばしいことである。然し唯知つたと思つて安心のゆるゆるな時代ではない、またどんなにか知識をかき集めて見ても相手は龐大なアメリカであつてみれば、そこに自ら限度がある筈だ。そこで要點はそれらの知識を綜合してその中に流れるアメリカの精神は奈邊にあるかをつきとめることである。建國以來三千年日本精神に培はれてきた我々は、この異質的なアメリカ文明の底に如何なる精神が流れてゐるかを今こそしつかり把握し、之を撃攘するために、自らの精神を一層鍛え上げなければならない。文化の面に於いて眺めるならば、現今はまた精神と精神との戦ひであると言へよう。我々はアメリカの精神を知るだけでなく、之に打ち勝たなければならない。（榊井迪夫 3）

一読してわかるように、これぞまさしく異文化理解研究の最たるものと言

えよう。何のための学びなのかがこれ以上に明快なものはない。時代と社会の要請に基づいて日本人はアメリカ文化の特性を今こそ真剣に学ばねばならないという梶井迪夫の意思は、堅固である。著者の広遠な学識に裏打ちされた学問的研究成果の実社会への還元の意図がはっきりと見て取れる書物である。戦時中においてはおそらく日本人一般は敵国のアメリカ文化を敵視したのであろうが、さすがにこの学術書はそうした皮相的なものではなく、冷静にアメリカ文化を分析した上で、英語英米文学の専門家として梶井は日本の読者に学の深奥を教授する。

梶井迪夫はこの書物において、まず現代アメリカ人気質の特色を精密に解き明かし、アメリカの歴史事情、特に独立戦争までの建国史を詳説した。そして次に、アメリカ建国の精神のなかに見られる清教主義の精神と辺境開拓の精神とに着目し、これら二つの精神は独立戦争後の時代においても形を変えながら生き残ったと梶井は言う。ただし、これらの二大潮流は、経済・産業の発展とともに物質万能の現代アメリカに移行するに従って甚だ変化し、もはやかつてのような純粋なものは窺われず、むしろ大衆は宗教を棄て、黄金に眼を奪われたと論述し、「今の彼等は精神よりも物質主義に覆はれてゐる」（梶井迪夫 253）ということを強調する。日本人の精神とは全く反対のものである、と梶井は述べる。それゆえ日本とアメリカ両国間には、相互に交わる回路がない、と以下の如く陳述する。

我々は古事記の神話や萬葉の素朴な心は我々の血液の中に現在尚脈々と生きつづけてゐることを切に感ずるが、彼等がたとへ理解しようとしてわからないのは、またその神代の大らかな精神であるだらうと思はれる。彼と我とは思想と思想との相通ふ通路がないのである。此の彼の思想と我が精神とに通ふ通路のないことを、我々としては銘記しておかなければならない。（梶井迪夫 256-257）

英語英米文学の専門家として研鑽を積んだ著者・榊井迪夫は、アメリカ人ならびにアメリカ文化についての概説をこの一冊の書物のなかで極めて精密に詳述した。ここに見られるアメリカ英語に関する言及も正鵠を射たものである。榊井迪夫のこのアメリカ文化論に関する著書は、内容的には総じて二十一世紀現在にも通用するだろう。二十世紀最大の社会学者マックス・ウェーバー (Max Weber) は著書『職業としての学問』(1919、三浦展訳2009)において、「学者が、彼自身の価値判断を持ち込んでいるときは、実際いつも事実の完全な理解が薄らいでいくものです」⁷⁾と警鐘を鳴らしているが、マックス・ウェーバーが言うところのそんなプロパガンダ的側面さえ除けば、私たちは榊井迪夫のこの書物のなかに時代を超えた普遍的なものを読み取ることができる。現に、榊井迪夫のこの著書から四十三年後に、司馬遼太郎は『アメリカ素描』(1986)を上梓しているが、アメリカ文化に関する考察において両者の間には総じて近しいものがある。司馬は、アメリカ人が自国のことを「ザ・ステイツ (the States)」と呼ぶことを取り上げて、そこには「法で作られたる国」、言い換えれば「文明という人工でできあがった国」⁸⁾という響きを感じ取れる、と言う。こうした司馬遼太郎のアメリカ観は、アメリカを覆っている物質主義を感じ取った榊井迪夫の嗅覚に通じるものがある。

『アメリカ文化の特性』という書物の出版を通して榊井迪夫は、当時の日本社会に向けて己の学問的業績を開陳し、実社会と交りたかったにちがいない、と筆者は考える。机上の学問に終わらせるのではなく、むしろ己の学知を十分に社会に活かすことによって、実社会との接点を見出し、実社会に役立たせようと望んだのではないだろうか。現に榊井は、「今述べ来つたアメリカ文化の諸相は単に知識の集積を意圖するものでは無かつた。彼を知ることが即ち私の優越せる精神を更に固める所以を意圖したのに外ならなかつたのである」(榊井迪夫 260)と、語っている。異文化間コミュニケーション

ン分野の学術的成果を実社会に応用し、社会連携を図ろうとしている著者の行動派としての姿勢が明白である。梶井のこの書物こそ紛れもなく実践知性としての英文学研究の一例と言えるのではないだろうか。

物質主義ではなく精神主義を説く梶井迪夫は、アメリカ文化に精通した英語英米文学の専門家として、当時の日本社会に向かって堂々と確信をもって日本文化の優越性を主張した。「我々の比類なき傳統に比せらるべき傳統は彼の國にはないのである。眞の意味に於て精神の名に値する精神はないのであると我々は信念を以てここに断言するを得る」（梶井迪夫 261）、と持論を述べた後、梶井は、戦争の勝利を謳う。

それ故に我々はたとへこの大戦争が長期に亘ることがあろうとも、決して精神力に於て負けることはない。断じてないのである。而して精神力に於て勝つことが同時に戦争に勝つ所の根底であるのである。その信念は我等のものであり、同時に我が後輩のものでなくてはならぬ。（梶井迪夫 261）

峻厳なまでに己の信念を貫き通そうとする梶井迪夫の学究としての一途な態度に、今日の私たち英文学徒はある種の嫉妬を覚えてしまう。現実社会との接触をひたすら希求し、専門家として知力の限りを尽くして社会貢献を試みようとした梶井迪夫に、私たちは羨望の念を抱かざるをえない。明治・大正以来の日本の大学英文科が主として啓蒙主義の立場から得意としてきた英米文化や英米思想の輸入・紹介が飽和状態に達してしまった二十一世紀現在、英米文学を専門とする者たちは、なす術がなく、打開策を求めて難儀しているのが実情だ。そんな私たち現代の英文学徒の眼には、梶井迪夫の戦時中の仕事はまぶしく映る。私たちは、実践知性としての英文学研究のありようを憧憬の念で、そこに見る。

このような実践知性としての英文学研究の他の例として、第二次世界大戦真っ最中の1942年（昭和17年）発行の『戦争と文學』（日本放送協會編）を挙げるができる。元々は「戦争文学」の話としてラジオで放送されたものが後に一冊の書物としてまとめられたのである。「はしがき」で、「日本人の世界史的使命を思ひながら、イギリス、ドイツ及びフランスといふ三國の戦争文學に就いて考へることは更に新しい意義を持つものと信じる」と、出版の意図を明確に述べている。「イギリスの戦争文学」の章は森六郎の執筆だが、森は、戦争文学とは何かと言えば、それは戦争が主題となっている文学のことだと明快に語り、フランスやドイツといったヨーロッパにおいて発達したものと述べる。森は、まるで大学で英文学史を講義するかの如く、イギリスの詩・小説・戯曲という幅広いジャンルに見られる戦争をテーマとした数多くの作品について淡々と論じる。特に、第二次世界大戦から生まれた戦争文学の主要作品の考察は圧巻である。森の沉着冷静な作品分析が続く。時代の趨勢を見極め、主題を敢えて戦争と文学に絞って進めていく森六郎のこの研究姿勢に、筆者は実践知性としての英文学のありようを見る思いである。

しかし、己が持てる専門的知識を十二分に実社会に役立てたいという強靱な意志をもって戦時中、果敢に執筆活動に勤しんだ榊井迪夫にとっては、敗戦は実に不幸なことであったと筆者には思われる。なぜなら、戦後思想がこれまでとはすっかり変わってしまったからである。戦後は「戦争は悪である」という思想一色に染まってしまったのだ。第二次世界大戦中は国家の意思に積極的に賛意を表明し、実社会とのコミットメントを強く希求した榊井迪夫のような英語英米文学研究者にとって、戦後のこうした時代風潮は、非常に居心地が悪かったであろうと推察される。太平洋戦争後の時代を一体どういう態度で生きてゆけばいいのかを、榊井迪夫はきっと悶絶しないわけにはいかなかっただろう。そうした苦悶を抱えつつ、榊井迪夫は戦後、名門広

島大学の英語学教授として広島学派を率い、あまたの優れた弟子を日本中の大学に送り込んだ。筆者は、英語学の泰斗・梶井迪夫の若き日の人間味溢れる情動的な研究姿勢に、今や時流となった自然科学的色彩を濃厚に帯びた「evidence-based」的な研究法とは一味違う迫真力を感じてしまう。人文学の真髄とも言える人間の痕跡が梶井の文章には存在するのだ。筆者は今、「情動的な研究姿勢」と表現したが、これはまさに、歴史学者・白永瑞が論考「社会人文学の地平を開く」(2013)⁹⁾の中で言う「感興」という記述に相当するであろう。

……計量的な指標としての評価の対象にはなりえない人文学そのものの秘密の一つは、人文学から得られる「感興」であることを認める。人文学を学習することで人間らしく生きる方向性に気づくときの感興は大切である。ここで、東アジアの伝統における儒教的な学問観を思い出してみよう。学習や研究のプロセスがもつ情緒的側面を強調し、人は学びを通じて何かを感じ、どこか変わらなければならないという主張は吟味に値する。もちろんそのような人文主義的伝統が余暇を享受できる人々、つまりある意味で特権を享有した階級（士大夫）の教養であったことは間違いないが、実はこれは西洋でも同様であった。しかし、このような特権をより広い範囲の社会階層にまで拡大しようとする努力のなかで、人文学の理念と制度が今日まで発展してきたことを認めるならば、人文学が進むべき未来の方向はすでに提示されているといえる。

その方向とは人文学の各専門分野の知識を習得することに留まるのではなく、学問を通じて人間らしく生きる道に気づくことの喜びを大学という制度の内外で共有できるように努力することである。私たちの社会人文学が追求する道がこれである。(白永瑞 135-136)

韓国延世大学校教授・白永瑞の上記引用文の中の「人文学」を仮に「英文学」に置き換えて読んでみると、まさに時代と社会を超えて、榊井迪夫のあの戦時中の仕事に通じるのである。現に白永瑞はこの論考において、以下のように、「実践人文学」という表現を用いている。今に生きる歴史学者・白永瑞が志向する「実践人文学」、即ち「社会人文学」の学術精神を、既に七十年前に榊井迪夫は先取りしていたと言えるのではないだろうか。

制度の外で知識と生、または職場と生活空間を結びつけようとする「実践人文学」モデルは、現在「危機の人文学」の出口としてこれまでにない注目を集めている。(白永瑞 132)

ところが、大学制度の中にいる今日の日本の英文学研究者はといえば、そのほとんどの者は、「生」ではなく、ひたすら「知」の追究に邁進していると思われる。「生」と「知」の分離を前提とした英文学研究に勤んでいる。換言すれば、日本の英文学徒は、己の個人的感情等は封印し、日本や世界の現実からも目を逸らし、ただひたすら学知の世界に閉じ籠っている。学問研究とは、主観をいっさい排し、客観性・実証性・論理性に依拠して「知」の追求に邁進するものだと、誰もが信じて疑わない。こうした学問風土のもと、現在の英語英米文学研究者が排除してしまったものが、榊井迪夫の七十年前の仕事の中に厳然と存在するのではないだろうか、と筆者には思われるのである。

以上の如く、本章では英語学の権威として戦後の日本の英語学界を主導した榊井迪夫の第二次世界大戦中の仕事を概観することによって、実践知性としての英文学研究のありようを考究したが、ここで脇道へ逸れる覚悟で、英文学・戦争・広島という連想から英文学者・松元寛の仕事にも少し触れておきたいと思う。松元寛は、榊井迪夫と同じく広島大学教授として多くの教え

子を育成し、日本の英文学界に貢献した学者であるが、彼は英文学の業績のみならず、戦争と平和に関する言説も残している。松元寛は、史上はじめて核兵器を投下された広島にあって、戦争と平和の問題に真正面から真摯に向き合った英文学者のひとりであった、と筆者は認識している。筆者は、上述の梶井迪夫の戦時中の仕事と同様、松元寛の戦争と平和に関する戦後の仕事をも、実践知性としての英文学研究の一例として捉えたいと思う。

松元寛のこの分野における代表的論考は、「原点としてのヒロシマ」(1979)¹⁰⁾である。彼の論考の「注」(6)のイギリスへの言及からも窺われるように、これは、英文学者としての博識を踏まえた幅と奥行きのある重厚な論説である。松元は、広島原爆被災を戦争被害としてのみ捉える視点を超えて別の方向に開かれた視野を持つ、と提言する。広島体験を特異な戦争被害だとする閉じられた認識だけではいけない、と言う。論考の「まとめ」に書かれたその言説の一部を挙げてみよう。

要するに、広島原爆被災という事件を、戦争の問題としては加害と被害との両面を含めた複眼的視野で眺めると同時に、戦争と平和にわたる文明災害として見る視点から見直してみる必要があるということであって、それができた時にはじめて、広島事件は、平和の探求の原点として、その追求の果てに「ヒロシマ」の思想を生み出すことができるのではないかということである。(松元寛 407)

原爆被災に関しては当然のことながら、松元寛以外の多種多様な意見・主張があるに違いない。彼とは全く逆の考え方もあるだろう。筆者は、これらの意見に対してそれが是であるか非であるかを判断する確かな根拠は持っていない。松元寛は、「人間らしい生き方」(松元寛 407)を求めて、従来諸説に拘束されることなく自説を提示したのである。原爆被災という事件

が当時の広島市民にとって被害であったことは間違いないが、しかし同時に広島は、東日本を総括する第一総軍司令部があった東京と並んで、西日本を総括する第二総軍の司令部が置かれた日本の最重要軍事拠点の一つであったことを忘れてはならないと、また、広島で被爆死した市民の中には軍人として中国大陸や南方の戦線で現地住民に対する残虐な加害の当事者であった可能性もあるなどと、松元寛は、本人が言うところの「やまがりくねった形で」(松元寛 407) 熟考を重ねながら、持論を展開した。1940年から1945年にかけて最も大規模かつ徹底的に無差別殺傷を実行したのは英国とアメリカだったという意見¹¹⁾が一方においてある中で、松元寛の「私たちは広島の被災を無実の被害だと言ってすませるわけには決していかない」(松元寛 399) という発言は、己の信ずるところを率直に語ったものであり、ことの是非は別として、重層的な響きを持つ。こうした多層的・複眼的考察を可能ならしめたのは、日本の大学で英文学専門家として研鑽を積む過程で体得したであろう「イギリスの知恵」のなせる業ではなかったであろうか、と筆者は推察する。政治学者・中西輝政の著書『国まさに滅びんとす』(1998)に拠れば、人間的資質の熟成とも言うべき「イギリスの知恵」は、実は日本の英文学者たちにとってはこれまで関心の対象となるものではなかった、とのことである。しかるに英文学者・松元寛はといえば、彼はこれを体得していたに違いないと、筆者は考える。

西欧の明示された学問や「社会科学」というものを明治以来、熱心に取り入れ、また、英文学への強い関心を抱きつづけてきた近代日本の知識人が、この「イギリスの知恵」には一貫して冷淡あるいは無関心でありつづけてきたのは驚くべきこと、といえるかもしれない。
(中西輝政 253)

一方で英文学研究者としての堅実な功績を残した松元寛は、他方で戦争と平和に関して積極的な発言をした。彼のこうした一連の仕事こそ、実践知性としての英文学研究の範例として筆者は捉えたいのである。

榊井迪夫から松元寛へと話が移ってしまったが、本章では英米文学研究者の言説を検証し、研究姿勢に窺われる実社会との接触のさまを考察した。次に、日本の英文学研究が孕む問題点に思いを馳せつつ、人文的知性のひとつである日本の英文学研究が果たしうる役割について考えたい。

3. 実践知性としての英文学研究

直木賞作家でもあり、英米文学の翻訳家でもある常盤新平の『遠いアメリカ』（1986）は、昭和三十年代前半の高田馬場界隈を舞台にした、作者の若き日の自画像とも言える小説である。主人公・重吉は、大学の英文科を卒業して、大学院に進学したものの、アカデミックな研究には馴染めず、大学院の授業に出るのをやめている。彼は、GIたちが前線で読み捨てたペーパーバックや雑誌を洋書の古書店で購入し、それらを読むことによって、実際のアメリカへの憧憬の念を募らせる。そして重吉は将来、大学の英米文学研究者ではなく、英米の文芸作品の翻訳家を目指す。

アメリカ文学を勉強するつもりでいたのに、間口がひろがってしまっ
て、どこから手をつけていいのか、わからないんだ。……………

……………いまの僕にはアメリカしかないんだよ。でも、そのアメリカ
は僕の場合、ペーパーバックと雑誌だけなんだ。知らない人が見たら、
ごみや屑の山と思うだろうな。（常盤新平 57-61）

小説の題名通り、アメリカは、主人公・重吉にとってひたすら仰ぎ見る憧

れの「遠いアメリカ」である。作者の分身である重吉の通う大学院のモデルは、坪内逍遙以来の長い歴史と伝統のある早稲田大学の英文科であろう。普通ならば将来の英文学者の卵とも言えるはずの大学院生・重吉の、アカデミズムの世界に順応できないという悩める姿から、私たちは少なくとも次の二つのことを感じ取ることができるだろう。その一つは、主人公の強烈なアメリカへのあこがれの気持ちが彼のアメリカ文学・文化への耽溺の源泉となっている点で、この凄まじいまでの勉学のモチベーションは、残念ながら、二十一世紀の我々からは失われてしまったということである。今では海外旅行や短期留学等が日常的となり、私たちにとってアメリカはもはや遠い存在ではなくなったのである。もう一つはと言えば、それは主人公・重吉が毛嫌いしたアカデミックな日本の英文学研究のありようである。テーマを絞り、辞書や学術研究書と首っ引きで文学作品を解釈し、科学的・分析的・論理的に論文を作成していく手法が重吉の肌には合わなかったという点である。この小説において見せる彼の言動は、英文学研究におけるアカデミズムとは一体何ぞやという本質的問題を現代の私たちに投げかけてくる。昭和二十年八月の敗戦を契機に日本の英文学研究界はますます隆盛を迎えるであろうと誰もが固く信じ、現にそうになっていった昭和三十年代初めにおいてすら既に、重吉の場合に見られるように、学術的な英文学研究法に対する懐疑が存在していたのである。これは今から六十年も前の話である。今日の日本の英文学研究界が本質的に内包している研究手法の是非に関して私たちに再考を迫る、貴重なエピソードと言えるだろう。

昭和三十年代前半の英文学界の様子的一端を知るのに適しているであろうという理由で筆者は、上記の『遠いアメリカ』に言及したが、実は昭和二十二年の段階で既に英文学者・本多顕彰は、日本の英文学研究の実相を冷静に見据えている。日本の大学の英文科は、本来的に総じて英文学研究の場というよりもむしろ、英語教員養成機関ではなかったか、と本多は著書『孤獨の

文學者』(1947)の中で言う。換言すれば、日本の大学の英文科は、英文学研究を標榜しつつも、その実態は英語取得の場であり、それゆえに英文学の学術的基盤は盤石ではないという説である。これは透徹した見解と言えるかもしれない。

わが國の大學の英文科は、従來文學研究の場といふより、就職の要件としての英語取得の場であつたといつた方がよいくらゐであつた。いはば、英語教員養成所であつて、文學志望の者は、むしろ異端視されるといふやうな傾向を持つた大學さへあつたのではないかと思はれる。このことはイギリスと戦争を始め、英語教育が廃止されさうになると英文科志望者が激減し、イギリスの旗色がよくなると、忽ち志望者が殺到するといふやうな現象が説明してゐると思はれる。イギリスに対する敵愾心から、英文學專攻を破棄したといふやうな例は殆んどないと思はれる。(本多顕彰 32)

また、著名な文芸評論家ならびに論壇人として第二次世界大戦後に活躍した知の巨人のひとり江藤淳¹²⁾の大学人としての履歴からも、私たちは今日の日本の英文学研究界が本質的に抱えている問題を如実に窺い知ることができる。江藤淳こと江頭淳夫は、まず英文学徒として出発している。慶應義塾大学文学部英文科で西脇順三郎、厨川文夫両教授の指導を受けた江藤淳は、1957年大学卒業後、大学院へ進むが、しかし、夏目漱石が英文学研究を断念して作家の道を歩んだように、そして前掲の重吉がアカデミックな英文学の道からはずれて翻訳家を志望したように、江藤淳は大学院を中退して文芸評論家の道を選ぶ。ただし江藤の場合、後になって恩師・厨川文夫教授に再び指導を仰ぎ、1975年に中世英文学を基礎とした研究で文学博士号を取得している(博士論文タイトルは『漱石とアーサー王傳説』)。アメリカ文学研

究者の慶應義塾大学文学部教授・巽孝之が江藤淳の原点は「英文学者」だと喝破している通り（1999年7月29日付け産経新聞）、江藤は英文学研究の心を生涯忘れぬまま、文芸評論家として、さらには保守派論壇人として一家を成した人物である。慶應義塾大学の学生時代に徹底した本文校訂の意義と手法を修得した江藤淳の代表的著作の一つとしてたとえば『閉された言語空間—占領軍の検閲と戦後日本』（1989）を挙げるができるが、これは、GHQによって日本の歴史や文化がいかにアメリカに都合のいいものにとって替えられたかを検閲文書の解読によって解明されたものである。この著書は江藤淳が9ヶ月間ウィルソン研究所で行った検閲研究の集大成である。江藤がこの著書の中で力説しているのは、GHQによる検閲の影響は決して過去のものではなく、今なお日本人の精神構造にとって足枷となっているという指摘である。江藤淳のこの著作は、慶應義塾大学英文科の学統ともいえるべき緻密なテキスト読解の手法がDNAとして江藤の身中に受け継がれていることを彷彿させるものである。巽孝之が、江藤淳の原点は英文学者だと言いつつ放ったのは、言い得て妙である。

江藤淳は評論家として華々しく活躍する一方、東京工業大学の助教授、教授を務め、その後、晴れて念願の母校慶應義塾大学の教授職に就く。ただし所属学部は出身の文学部英文科ではなかった。湘南藤沢キャンパスの環境情報学部である。英語の優れた使い手であり、イギリス流の学問研究の極意をも体得している正統学派の江藤淳にしてみても、語学とIT技術を特色とするこの学部は彼の性には合わなかったようである。江藤は定年前に辞職する。彼に関するこのエピソードから、本来の居場所が見つからず悶絶する英文学研究者の悲哀と、英語教育学が英文学を凌駕する実態とを、私たちは切実に感じずにはいられない。この辺りを、文芸評論家として文学者の苦悩や秘めた思いを追求する松浦和夫は、著書『文学者 知られざる真実』（2012）の中で以下のように記している。

いったんは法学部の客員教授になり、そこから転じた慶応のSFC教授職に江藤は適応することができなかった。その学部はコンピュータと語学を重視して世界に通用する学生を育てるのだそうだ。江藤はIT技術を嫌った。SFCの教員への事務連絡はすべてE・メールでなされていたが江藤教授には事務職員が書類を持参していた。効率だけでは学問はやれぬと学部の雰囲気にも違和感を擁っていた。『SFCは慶応か』とつぶやき三田にあるというアカデミズムに最後まで共感していた。江藤は三田にある法学部で、研究室からイタリア大使館の裏庭が見えると喜んでいて、彼の妹が嫁いだ国の大使館である。学生時代に自分の通った三田キャンパスとその周辺に蓄積された伝統の街に江藤は郷愁を感じていた。ほかでもない福沢諭吉が開いた三田キャンパスに教授として通うことを夢見ていたのだ。かつて閉ざされた夢を。(松浦和夫 46)

現に江藤は著書『作家は行動する』(1959)において、自然科学的研究態度よりも、人間を相手にする文学的態度を好んでいる様子が見て取れる。江藤にとっての湘南藤沢キャンパス環境情報学部は、文学的本領を發揮できる場所ではなかったようである。

自然科学の言語は完全に機能化された記号であるところの数式であるが、この態度—行為は現実を客体化する行為であるといつてよい。客体化するということは、対象から人間の痕跡をはぎとってしまうということであって、自然科学者が相手どる現実、したがって、そこからあらゆる人間の痕跡をはぎとられた「現実」—「自然」だということになる。この「自然」が非歴史的な存在だということはいうまでもないであろう。なぜなら、歴史は人間が創るものであるが、「自然」

の上に人間はのつかっていないから。しかし、科学者の言語がいかに普遍的で機能的なものであつても、記号であることにはかわりはない。つまり、科学者たちは定量化し、記号表示することなしには、絶対に「自然」そのものに触れることがない。彼らの場合、いつも理論は実験によつて証明される。この検証行為が科学の進歩をささえてきたものであるが、しかし、その実験の結果もまた記号の表示によつてしかたしかめられない。(江藤淳 22)

ところが時代が変わって今、江藤淳にとっては肌が合わなかったこの湘南藤沢キャンパス環境情報学部には、まるで水を得た魚のように、学生に「生きる本質」を説き続けている異言語・異文化コミュニケーション専門の長谷部葉子准教授がいる。英語教師でもある長谷部は、座学ではなく、フィールドワーク的なものを駆使して、優れた人材を社会に送り出している。彼女の場合、実人生と専門研究とがみごとにまで一致している。換言すれば、長谷部葉子の大学教師としての専門は、彼女の人生体験の中から自ずと生まれてきたものようである。著書『今、ここを真剣に生きていますか?—やりたいことを見つきたいあなたへ』(2012)の中で、彼女はこのことを披歴している。閉塞感漂う現代日本社会にあって、若者に生きる勇気を与え続けている英語教師・長谷部葉子の大学人としての実像から、英語教育実践学が英文学を凌駕したなど、私たちはしんから実感せざるをえない。実際のところ、「生きる」ことに力点を置いた教育実践に優るものはないだろう。現に今、若者たちは救世主のような指導者・教育者を切実に求めている。長谷部葉子は、学生たちの心奥に誠実に応えているのであろう。

この家庭環境から、自然に異言語・異文化コミュニケーションに対する意識が芽生え、年を経るごとに家庭における自分の役割を心得

るようになりました。つまり、私にとっての「異言語・異文化コミュニケーション」は、父と母という、ごく身近の「家族」という関係性のなかで生まれた問題意識なのです。

この父と母の狭間であって、楽しいながらも矛盾におつかる瞬間に恵まれて育ち、その矛盾に鍛えられて、社会に対する洞察力、批判的精神も自然に養われた気がします。でもそれは五〇歳を越えたいまだから言えることで、子どものころはその矛盾に結構悩みました。(長谷部葉子 200)

英文学でこそないが、異言語・異文化コミュニケーションを基礎とした英語教育実践学の真髄を長谷部葉子の仕事の中に見る思いがする。彼女のこうした実践的教育・研究活動を見てみると、生きるということ、即ち、「生」を前面に押し出した教育と研究がこれからの日本の大学教育の中核を占めるであろうことを私たちは意識せずにはいられない。江藤淳が、『夏目漱石』(1956)、『漱石とその時代 第1・2部』(1970)、そして『漱石とアーサー王傳説』(博士論文1975)といった具合に、漱石に関して執拗に健筆を振るったように、長谷部葉子は、実社会と直結した実践的英語教育を通して「生きる」ということの本質を学生に教え続けている。慶應義塾大学英文科において連綿と受け継がれてきた人文学的学知の体現者・江藤淳の大学人としての煩悶ぶりと、逆に、日々生き生きと教育・研究活動に勤しむ長谷部葉子の澁刺とした姿を比べたとき、私たちは現在の日本の大学における学問自体の揺らぎ・変質をしんから感じざるをえない。

ことほどさように、果たして日本の英文学にはもはや救いの道はないのであろうか。これに対する答えとして筆者は、英文学研究者一人ひとりが己の研究の社会的意義について真剣に自問する以外に方法はないと思う。現に、英文学者の大阪大学教授・伊勢芳夫は、共著『「反抗者」の肖像—イギリ

ス・インド・日本の近代化言説形成＝編成一』(2013)の「あとがき」において、「今や、非西欧圏の研究機関に所属する文化・文学の研究者にとって、西欧の研究の紹介、模倣、そして書き換えの時代は終わり、研究者自身の視点から主体的に研究する時代に入ったと考えられる。そのような研究へと方向転換しなければ、非西欧の文化・文学研究者は生き残れないだろう」と、己の胸の内を正直に吐露している。このように、根底から学問研究の在り方が変容し揺らいでいる昨今、ブルガリア生まれのフランスの文芸批評家・ツヴェタン・トドロフ (Tzvetan Todorov) が著書『文学が脅かされている』(2007、小野潮訳2009)¹³⁾の中で、人間理解のためにも幅広い分野で文学作品が果たす役割は大きい、と述べている点に注視するのも意義あることだろう。

文学の対象が人間の条件それ自体である以上、文学を読み、それを理解する者は、文学分析の専門家になるのではなく、人間存在を知る者となるだろう。人間を認識するという作業に何千年来取り組んできた大作家たちの作品に沈潜する以上に優れた、人間の振舞い、情念の理解のための導入教育があるだろうか。そうであってみれば、人間関係に立脚するあらゆる職業のための準備として、文学教育以上に優れたものがあるだろうか。もしこのように文学を理解し、このように文学教育を方向づけるなら、未来において法学を学ぶ学生、政治科学を学ぶ学生、未来のソーシャルワーカー、心理療法士、歴史家、社会学者にとってこれ以上に貴重な助力があるだろうか。……………
……………こうして文学の研究は、人文諸科学の内部において、事件の歴史、思想史といった学科の傍らにその場所を見つけられるだろう。これらの諸学科は諸作品によっても諸教説によっても、さまざまな政治的行為によっても、社会的変化によっても、諸民族の生

活によっても諸個人の生活によっても、自らを發展させ、その結果思考を進歩させるのである。(ツヴェタン・トドロフ 73-74)

トドロフは文学全般について語っているが、彼の主張は、日本の英文学研究界にも充分、適用可能であると思われる。実際、まさにトドロフが言うように、これからの日本の英文学研究には、人間理解のための「貴重な助力」的任務が期待されているのではないだろうか。これこそ実践知性としての英文学研究の一例ではないだろうか。

前掲の伊勢芳夫が述べる主体的な研究を志向しつつ、具体的にはどのような構えで今後の英文学研究を進めていけば将来に対する展望が開けて来るかを述べて、本章のまとめとしたい。

4. 展望／まとめ

英国の英文学研究者であるロバート・イーグルストーン (Robert Eaglestone) の著書 *Doing English: A Guide for Literature Students*, second edition (London: Routledge, 2002) は、本の題名 (*Doing English*¹⁴⁾) から窺われるように、英文学研究において私たちは何をなすべきかを詳細に、かつ具体的に論じた実践的書物である。特に、迷走し、生彩を失いかけている今日の日本の英文学研究界にとっては、第4部第12章 'Interdisciplinary English' が有益であると思われる。著者は、英文学という科目は最も「ファジー」な科目、即ち、本質的に学際的な側面を持つ豊饒な科目であることを強調し、それゆえに英文学は何物にも囚われない自由な研究を許容すると述べ、さらに科学と英文学に関しては、両者は対立関係にあるのではなく、共通の地盤に立っていて互惠関係にあると言い、最後に、英文学はいまだに進化しつつあり、とりわけ広範な文化研究への活路が開かれていると論じる。イーグルストンのこの意見は、袋小路に入っしまい立ち往生している私た

ち日本の英文学専攻者にとっての一条の曙光である。そしてこれは、前掲のツヴェタン・トドロフの論にも一脈相通ずるところがある。イーグルストーン自身による要約をそのままここに引用してみよう。

- ・ The subjects we construct are interwoven with other subjects and never clear-cut. English is perhaps the ‘fuzziest’ — it is closest to the shifting changes in politics, because there is no ‘right answer’ and no unique, central skill in English. English also draws upon, but also feeds into, a very wide range of disciplines.
- ・ All this means that English is the subject most open to discussion, argument and change. It also gives those studying English enormous freedom to explore new and changing ideas.
- ・ English and the sciences have long seemed opposed, but they could benefit from one another. Science can help us to appreciate ‘the poetry of the cosmos’, while English can help us to be more culturally sensitive.
- ・ English is still evolving. One route might be for English to become ‘cultural studies’. Another is for there to be more ‘original’ or ‘creative’ writing. English continues to focus on enabling you to respond to the world around you. (Robert Eaglestone 133)

私たち日本の英文学専攻者にとって有意義だと思われる箇所を、本章の論旨である実践知性としての英文学研究の視点からまず引用したが、実は著者ロバート・イーグルストーンは第1部第1章‘Where did English come from?’の中で、英文学という学科目がどのような歴史的背景のもとでイギリスに設置されるに至ったかを詳述している。英文学の本家であるイギリスの事情を

知っておくことも大切であろうから、以下に、簡潔にまとめてみる：「元々英文学研究なるものはイギリスの大学では受け入れられず、特に古典学の教授たちにとっては無用の長物であった。ところがこの英文学は1835年、一つの正式な学科目としてインドにおいて誕生した。当時インドを統治していたイギリスは、英文学研究を通して現地のインド人をイギリス化させようと目論んだのである。そしてやがてこれがイギリスに逆輸入されることになる。そうした逆輸入者の代表的人物が、詩人・思想家のマシュー・アーノルド(Matthew Arnold)であり、彼は当時のイギリス人に文学的教養を身につけさせようと思ったのである。具体的には、有益で文明的な道徳的価値観の修得が目標とされた。これに対して、英文学を研究してもほとんど意味がないと考える一派も存在し、彼らは、教養ではなく、むしろ言語研究としての英文学を志向した。こうしたせめぎあいの中、1893年オクスフォード大学に英文学の学位コースが導入されたが、英文学専攻は主としてフィロロジ研究を意味した。この流れが変わるのは1917年以降である。ケンブリッジ大学の講師たちが中心となって、主としてフィロロジから成り立っている英語専攻コースの抜本的改革を進め、やがて言語研究だけではない、今日の私たちが知っている豊潤な英文学の基礎が作られたのである」。

このように、第1部第1章‘Where did English come from?’の章から私たちは、イギリスの英文学研究が本来的に内包する教養主義的側面と言語教育的側面の二つをまざまざと見せつけられる思いがする。現に著者ロバート・イーグルストンは、後者の側面、即ちテキストを緻密に読むことを念頭に置きながら議論を進めていることを私たちは忘れてはならない。彼の文学論の基礎には常に、テキストの読みと解釈を重視する姿勢が存在するのである。

筆者自身は、大学人としての実体験から、かねがね英文学という学問形態自体に潜む特性に目を向けてきた¹⁵⁾。英文学という学問領域はあくまで「英」と「文学」とが合わさったものであり、「英」、即ち「英語」だけにい

から関心があってもそれだけでは不十分であり、もう一方の「文学」の方にも興味や造詣がなければならぬ。後者の「文学」は、外の紛れもない物質的現実とは違う、内なる心の中の現実への志向が必然的に求められるということになる。このように、「英語」と「文学」の、互いに質の違う二つが同時に求められるとき、学生にとっての負担は並大抵のものではないだろう。「英語」と「文学」の二つをバランスよくさばくことは、至難の業である。特に、前者の「英語」ばかりが社会的ニーズとして広く求められる現在、学生は英語学習で目一杯となる。よって「文学」は衰退の一途をたどることになる。

こうした現状下、管見の限りでは、日本の英文学研究者たちは今、前掲の伊勢芳夫の言説にあったように、主体的な英文学研究の追求に日々、呻吟しているのではないだろうか。何かを渴き求め、独力単身で渾身の力を振り絞って英文学研究に勤しむそんな彼らの態度から、意義ある研究成果が少しずつ生み出されているのではないかと、筆者は確信する。これらは今後の日本の英文学研究にとっての指標となるだろう。そのいくつかを以下に挙げたい。

二十一世紀現在の世界に直結した、広く政治や経済や宗教などに関わりのある問題に目を向ける英文学研究者は、たとえばインド英語文学を追う。世界の縮図ともいえる激動のインドの現代文学と向き合うことで、言語・民族・国家・宗教・差別・貧困・環境といった現代人が抱える切実で深刻な普遍的テーマの探究が可能となるという信念に基づいてなされる研究方法である。アジア系アメリカ人作家によって書かれた文学の研究にも同じことが言えるであろう。

他方、上述の論究とは異なり、どちらかと言えばこれまでの日本の伝統的な英文学研究法に則り、たとえばシェイクスピア (William Shakespeare) やディケンズ (Charles Dickens) といったイギリスを代表する英文学の正

典を研究対象とするアプローチも存在する。テキストの言葉に真摯に耳を傾け、丹念に読み解こうとする、その地道な研究姿勢は、時代を超えて意義がある。ただしこの場合、英文学研究者は、単に業績稼ぎのためにのみ論文を執筆するのではなく、何のために筆を執るのかを常に自問しつつ、究極的にはたとえ間接的であれ、社会への貢献を目指した仕事をすべきだろう。

さらに次に挙げるのは、言語教育的側面に重きを置いた英文学研究法である。英文の一語一句に拘り、たとえば英語学で言う「語用論」等を駆使して徹底した訳読作業を行う手法である。その際、教材としては文学作品が取り上げられる。これは、英文学を英語教育学に取り入れるという研究姿勢である。換言すれば、英語教育学の応用篇としての英文学の活用である¹⁶⁾。ややもすれば特に昨今の日本の英語教育の現場では、英語教育低迷の元凶として訳読が悪者扱いされがちだが、この訳読作業は、使い方次第では一層豊かな言語活動を推し進めることもでき、高度な読解力を養成することもできるのだという考え方に立脚している。このような「訳」の効用とか「文学と教育」の融合とかを説く示唆に富む書物として、ガイ・クック (Guy Cook) の *Translation in Language Teaching: An Argument for Reassessment* (2010) や H. G. ウイドゥソン (H. G. Widdowson) の *Practical Stylistics: An Approach to Poetry* (1992) が私たちには馴染み深い。前者のガイ・クックはイギリスを代表する応用言語学者であり、後者の H. G. ウイドゥソンはイギリスの著名な文体論研究家であり、同時に応用言語学者でもある。日本においても斎藤兆史¹⁷⁾、菅原克也¹⁸⁾、山本史郎¹⁹⁾ といった英文学者たちによるこの分野の顕著な仕事がある。前掲のロバート・イーグルストンの論ともツヴェタン・トドロフの論とも通じるが、ケンブリッジ大学英文科創立メンバーの教え子の一人としてケンブリッジ大学英文科に職を得て、英文学で学位を取った F. R. リーヴィス (F. R. Leavis) は、著書 *Education and the University: A Sketch for an 'English School'* (1943) において、英文科の果

たす役割は単に英文学の専門知識を教えることだけではなく、むしろ知性の訓練だと言い、文学作品読解力育成は理解力や判断力や分析能力の鍛錬を意味する (By training of reading capacity I mean the training of perception, judgment and analytic skill commonly referred to as 'practical criticism' — or, rather, the training that 'practical criticism' ought to be.)²⁰⁾、と論述する。これは、上述の斎藤兆史、菅原克也、そして山本史郎の学問的信念と同一である。

東京大学大学院教授・石田英敬は、「人間の精神や文化の研究は、認知科学や脳科学や情報科学に認識論的主導権を奪われて、人間科学の「自然主義化」に屈してしまった感さえある」²¹⁾と慨嘆するが、筆者は、自然科学としてではなく人文学の一環として今後の日本の英文学研究にも再生の道は残されている、と思う。

本章は、かつて日本の英文学界を主導した偉大な英文学者の言説の吟味・検証を通じて見えてくる、情動的で主体的な「実践知性としての英文学研究」の一端を論証したものである。英文学者の真率な発言は、私たちに現在の日本の英文学研究者の本来あるべき基本的態度を教示した。換言すれば、英文学の社会性の大切さを認識させてくれた。今後、日本の英文学研究に携わる者は、学知の世界に閉じ籠ってしまうのではなく、常に何らかの形で社会と関わり、社会に貢献する気持ちを忘れてはいけないということを私たちに教えてくれたのである。

異文化間コミュニケーション学者・八島智子関西大学教授の言説「日本の若者のエンパワーメントに英語教育の果たす役割は大きい」²²⁾に倣って、筆者も「日本の若者のエンパワーメントに英文学の果たす役割は大きい」と述べて、本章を終えたい。

注

- 1) 平岡敏夫（編）『漱石日記』（岩波書店、1990）、p. 30.
- 2) 平岡敏夫（編）前掲書、pp. 46-47.
- 3) 米原万里『米原万里の「愛の法則」』（集英社、2007）、pp. 179-180.
- 4) Cf. 拙論「日本の英文学研究と戦争」（入子文子編『英米文学と戦争の断層』関西大学出版部、2011所収）
- 5) 白井厚『大学における戦没者追悼を考える』（慶應義塾大学出版会、2012）、pp. 242-243.
- 6) 松本道介『反学問のすすめ』（邑書林、2002）、p. 183.
- 7) マックス・ウェーバー『職業としての学問』（1919；三浦展訳、プレジデント社、2009）、p. 67.
- 8) 司馬遼太郎『アメリカ素描』（読売新聞社、1986）、p. 39.
- 9) 白永瑞「社会人文学の地平を開く」（文景楠訳、西山雄二編『人文学と制度』未来社、2013所収）
- 10) 松元寛「原点としてのヒロシマ」（山田浩・森利一編『戦争と平和に関する総合的考察』広島大学総合科学部、1979所収）
- 11) Cf. 竹尾治一郎「旧制高校と教養」（『世界思想』世界思想社、2009春36号）、pp. 50-51.
- 12) Cf. 拙論「日本の英文学研究と戦争」（入子文子編『英米文学と戦争の断層』関西大学出版部、2011所収）
- 13) ツヴェタン・トドロフ『文学が脅かされている』（2007；小野潮訳、法政大学出版局、2009）
- 14) 著者ロバート・イーグルストンが著書で言う‘English’は、学科目あるいは制度としての英文学の意味である。
- 15) Cf. 拙論「ブロンテ姉妹はわれらが救世主たりうるか」（宇佐見太市他編『外国語研究一言語・文化・教育の諸相』ユニウス、2002所収）

- 16) Cf. 拙論「英語教育における英文学研究の意義」(『関西大学教職課程研究センター年報』第 15 号、2001 所収)
- 17) Cf. 斎藤兆史編『言語と文学』(朝倉書店、2009)
- 18) Cf. 菅原克也『英語と日本語のあいだ』(講談社、2011)
- 19) Cf. 山本史郎『名作英文学を読み直す』(講談社、2011) Cf. 拙論「書評：山本史郎著『名作英文学を読み直す』」(『年報』ディケンズ・フェロウシップ日本支部第 34 号、2011 所収)
- 20) F. R. Leavis, *Education and the University: A Sketch for an 'English School'* (Books for Libraries Press, 1943; reprinted 1972), p. 69.
- 21) 石田英敬「瀕死の「人文知」の再生のために」(『中央公論』2009 年 2 月号所収)、p. 53.
- 22) 八島智子「海外研修による英語情意要因の変化：国際ボランティア活動の場合」(*JACET Journal* No. 49, 社団法人大学英語教育学会、2009 所収)、p. 67.